

作主の未だ詳らかならぬ歌一首

三八三四番

梨棗なしなつめ 黍きみに粟あはつ次つぎぎ 延はふ葛くずの 後のちにも逢あはむと
葵花あふひはなさ咲さく

新田部親王に献る歌一首

三八三五番

勝間田かつまたの 池いけは我われ知しる 蓮はちすなし 然しか言いふ君きみが
ひげなきごとし

倭人を誇る歌一首

三八三六番

奈良山ならやまの 兎手このて柏かしはの 両面ふたおもに かにもかくにも
倭人かだひとが伴とも

三八三七番

ひさかたの 雨あめも降ふらぬか 蓮葉はちすばに 溜たまれる水みづ
の玉たまに似にたる見みむ

右の歌一首、伝へて云はく、右兵衛なるものあり姓名未だ詳らかならず、歌作の芸に多能なり。ここに府家に酒食を備へ設けて、府の官人等に饗宴す。ここに饌食は盛るに、皆蓮葉を用ちてす。諸人酒酣にして、歌儂駱駝す。すなはち兵衛に誘めて云はく、「その蓮葉に閑けて歌を作れ」といへれば、登時声に應へてこの歌を作る、といふ。